

## ケアの人間学のために

授業科目名	ケアの人間学のために	単位数 2 単位
英語標記	Philosophical Anthropology of Care	
授業コード	第 1 学期 360110 第 2 学期 360211	
受講人数	20 人以内	
担当教員	小林 恭	
対象	全研究科大学院生	
開講時間等	第 1 学期＝月曜 3 限 (4 月 12 日～)、第 2 学期＝月曜 3 限 (10 月 4 日～)	
開講場所	第 1 学期：吹田キャンパス：医学部保健学科 第 8 講義室 第 2 学期：豊中キャンパス：理学部 E-215 講義室	
キーワード	自覚の場所的構造、二重世界内存在、情念の哲学的人間論	
授業の目的	人間存在の哲学的反省をつうじてケアの本質を研究する。人間における「ケアという出来事」に意味があるとすれば、そのような事象を必然的に生み出している「人間の本質」はそもそもどのようなものと仮定されるか、また「人間の本質」をそのようなものと前提するならばそこから個別のケアの諸現象はどのような意味が読み取られてくるか、という「部分と全体との解釈学的循環」の形をとる哲学的人間学の方法によって考察を進める。これがタイトルの、「ケアの人間学」ということの意味である。	
講義内容	授業では、直接にはナイチンゲールの思想を主題として取り上げるが、間接には西田幾多郎の人間の場所的自覚論、大乘仏教において衆生のあり方を「病い」とみる人間観などを視野に入れながら、ケアの原点を探求する。 授業の方法としては、ナイチンゲールの『看護覚え書き』という古典的テキストを中心ににおいて、その一部（はしがき、序章、第 4 章、補章など）および「聖トマス病院看護見習生宛の第 2 書簡（コピー配布）」を綿密に解説しながら、その現代的意義とそこから展望される人間学的意味の可能性を提起する。そしてナイチンゲールの示唆する看護論と、西田幾多郎の哲学や大乘仏教的伝統の場所的自覚の構造論、および仏教やキリスト教の宗教の違いを超えて共通する「宗教心」の原点との連関を論じてゆく。 テキストである『(1860 年版) 看護覚え書き（うぶすな書院）』は必ず用意してもらいたい。英語の原文は必要に応じてプリントを配布する。そのほかに資料として彼女の論文、“Sick-Nursing and Health-Nursing: A paper read at the Chicago Exhibition, 1893”の重要箇所は、必要に応じて部分的コピーで紹介する。 『看護覚え書き（1859 年版）』の英文は、インターネットの電子テキストでも公開されているから、入手して 1860 版との違いを比較検討すると有益であろう。 <a href="http://digital.library.upenn.edu/women/nightingale/nursing/nursing.html">http://digital.library.upenn.edu/women/nightingale/nursing/nursing.html</a>	
教科書	ナイチンゲール『看護覚え書き』（うぶすな書房）	
参考書	講義時に適宜紹介する。	
成績評価	平常点と適宜課題。	

### 現代における「ケア」概念検討の必要性

生病老死が人間の基本的事実であるかぎり、ケアすることケアされることは、人間にとって付随的な事柄ではなくその存在構造の本質をなすものであろう。

しかし「ケア」という語は、意味に関して不確かなまま現在様々な領域で多用されている。医療・看護、福祉・介護、心理、教育、養育等の分野は「ケア」と深い関係がある。これらの諸領域は従来分断されていたが、これら諸領域の連関を明確にするためにも基礎作業としてケアの本質について根本から考察することが必要である。

### なぜナイチンゲールを取り上げるか

これには二つのねらいがある。

第一はナイチンゲールの看護についての思想が、従来の看護学の立場からの解釈が見落としてきた深い哲学的宗教的思索を背景にもつものであることを提示することである。彼女のプラトン哲学の素養やキリスト教神秘主義についての造詣は、当時第一級のオックスフォードの哲学者と対等に議論をかわすほどのレベルであり、その宗教への理解は 2 1 世紀の今日、諸宗教対立を超えての相互理解の場が求められる状況にかんがみて遜色のないもの示していることを提示し、ナイチンゲールについての評価を一新することが一つの目的である。

第二のねらいは、そのような現代を先取りしたような地点をナイチンゲールの思想が拓いていたとするならば、そこから論じられた彼女の看護論には、今日の我々の状況に対して示唆的なケアの人間学の原点となるものが読み取れるはずであり、それを授業では「場所論的看護論」と名付けその今日的意義（およびその不易性）を確認して、今後のケア理論のための展望を得ることである。

### 『看護覚え書き』という書物の魅力

初版で 80 頁足らずのこの小品は、最初の二ヶ月で少なくとも一万五千部が売れたといわれ当時のベストセラーであった。以来 140 年以上のあいだ版を切らしたことはない。内容は看護を主題にしたものであることは言うまでもないが、これは宗教の書であり、倫理の書であり、日常作法の書であり、かつ人間の事実のディテイルを活写した文芸であり（当時の陸軍大臣シドニー・ハーバートは、「この面白さは小説など比ではない」と評した）、それでいて看護の書であり、それらがびったり一つになっている。ヴィクトリア朝の英語でやや読みにくいところがあるかもしれないが、飾り気のないパワフルな文体であり、ぜひ原文に触れてほしい。